

## 最優秀賞

# テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「心のバリアフリー」

## —やさしさの輪を広げたい—

宮城県仙台二華高等学校1年 鈴木美紀

私には四歳上の姉と三歳上の兄、それに年子の妹がいます。兄は重度の自閉症児、妹は自閉的傾向のある汎性発達障害児です。

自閉症という障害は、総じて人との交わりが苦手な多少のこだわりを持つています。兄の場合は好奇心旺盛で活発なのですが、言葉が出ないもどかさから時には大声でわめきます。妹は思い通りにいかないと地団駄を踏んで暴れ、時には自傷行為にも及びます。

これまで、私たち家族は肩身の狭い思いをたくさんしてきました。冷たい視線を浴びせられるのは当たり前。二人が幼い頃は、「しつげが悪い」「迷惑だ」とキツイ言葉を投げられたことも多々ありました。当然、地域の中でも当時は理解者が少なかったので、姉は「お前の弟バカじゃん」「お前の弟から病気がうつる」などの悪口を言われていました。気丈な姉はその場では「私のかわいい弟だからよろしく」と言っていたのですが、家ではわんわん泣いていました。母はそんな姉を抱き寄せ、何度も涙を拭いていました。

この光景は、幼い私の心も痛めました。私は、兄と妹の存在を疎ましく思うようになったのです。傷つきたくなくて、二人のことは何が何でも隠したい気持ちでいっぱいでした。

そのような中、私は母の勧めで大学の障害児兄弟支援サークルに入会しました。障害児を兄弟に持つ小中学生・高校生が、学生さんに支えられながら楽しい活動をしていく、という趣旨の会です。兄弟に障害児がいることで我慢を強いられることも多い私たち兄弟、そして家族をサポートする会です。

そのサークルでは、当然ながらいろいろな障害を持つ子とその家族が集まっています。知的障害や情緒障害がある子、車椅子利用の身体

に障害がある子。学生さんは障害のあるなしに関係なく、私を含めて相手に応じて上手に接していました。

ふと、兄や妹、そして障害のある友だちの生き生きとした姿が目に入ってきました。同時に、私はその笑顔に一つ一つの命の重みを感じていました。みんな違う人生ですが、私と同じ今を生きているのです。私は、自分の尺度で障害者を見ていたことに気づいたのです。

私は、このサークルとの出会いで生まれ変わることができました。それからというもの、私は様々な場面で「心のバリアフリー」について考えるようになりました。心のバリアフリーとは、主に障害者に対する偏見や差別をなくすこと。しかし、「いじめ問題」を考えると、全ての人に当てはまると思っています。

人は「みんなちがって、みんないい」存在です。思いやりがあり、誰に対しても自然に手を貸せる世の中。そういう温かい心が根付いている社会が、障害者に限らず万人に優しい社会になるのです。ありのままを受け入れ、認め合う社会こそが「共に生きる社会」につながるっていくのではないのでしょうか。

さて、今現在も私はサークルに在籍中です。兄は、この春より通所施設で生活介護を受けながら働いています。残念ながら発語はありませんが、多動で行方不明になったこともある兄が集中して仕事をしています。妹はやっと二語文が出て、簡単なやりとりが可能になりました。あれだけのかんしゃく持ちが影を潜め、細かい作業を器用にこなしています。

そうです、私にはこんなに素晴らしい能力を持った兄と妹がいるのです。そんな二人に、姉として妹としてやってあげたいこと。それは二人が少しでも生きやすい世の中になるよう、社会に働きかけていくことです。

それには、強い気持ちで今もなお人々の心にあるバリアを壊していかなければなりません。そのために、私は二人の存在を隠さず、兄弟仲良く堂々と生きていきます。その上で、これからも障害のある人と積極的に関わっていくつもりです。社会に彼らの笑顔をアピールしていくことで、やさしさの輪を広げていきたいと思っています。